

3月29日、札幌地裁で大森勝太郎への判決公判がある。

「遺留証拠物」報告書



さんと一しょに、傍聴にゆくこととした。傍聴は道草して出来れば未知の友人にちやぐる。アーブと出会そたらうれしいナと思つて。めうたに出まない長旅だから。

旅中へ連絡は、札幌市北区北18条西18条ビル、ひらひら、気付(3月30日朝)

前夜からウリ事務所に泊ったAさんらが、朝五時の一一番電車で、矯刑務所へ出かけていった。ぱくは、連絡電話待ちの留守番役。

いつまでも薄暗くて、夜が明けないなア、と思つてたら、雨がひっそりと降り出している。

十月一日、山田契二さんの満期出獄の日。

十一時すこしまえ。

石段下の遠くから、人声と、たくさんの足音がする。窓から首をつき出すと、

ひとかたまりになった一団が、一せいに昇つてくる。Bさんの大声が、もう、玄関廊下あたりで聞えて――

石段下の遠くから、人声と、たくさんの足音がする。窓から首をつき出すと、

ひとかたまりになった一団が、一せいに昇つてくる。Bさんの大声が、もう、玄関廊下あたりで聞えて――

この一月七日付読売新聞(北海道版)は六段の見出しのトピック記事で、さわめて異例とも驚きともいえる予測を報道した。それは……

コク道行爆破、6年半ぶり結審の無罪か「大森」『決の手欠く物証』(札幌地裁、早ければ3月判決)、ナント『無罪か「大森」』なくて、将来に備する。しかも裁判結果に關して、記事のなかの一部分などもかく、横並きの大見出しがてるなんて趣態は、よっぽど検察の立証がめうちやうやで、権力側のむかべつたりの報道が当り前のブンヤイんすうが、裁判経過の中で、事件の「アーブ」上げと更ぬかずにはおれなかつた――といふことに。

大森さんは、76年6月、爆発物製造持容疑という名目で逮捕された。これが別件逮捕つまり逮捕するための口実だったことは、その後不認されてしまふことでもしれる。そして権力が狙いをつけた本命の事件、北海道本部爆破事件(75年7月発生)。(これも又不起訴)、北海道本部爆破事件(76年3月発生)の容疑者として再逮捕され、以来七年に近い牢獄生活を経て、その間、検察側の、まず逮捕、拷問によつてつくろつとした自白(アーブ)上げは、大森さんの壮絶ともいふべき精神と肉体のガタ鬼全盛況によつて坐折し、さらに決め手となる物証が何ひとつないという(やつてなし俺と目覚めてかかる)と大森さんは三ヶ月後から出した本の題名として、いみじくも喝破してゐる)裁判経過のうちに、じつじよ3月28日判決をむかえることになつたのである。

読売新聞記事はこうかいている。――「大森被告は、独自の「反日亡國」思想という立場から、これまでの公判庭で「當時爆弾製造の準備をしていた」とと裁判は全く別問題で、①大森犯行を裏付ける証拠がなく、「疑惑しきは被告人の利益に」という刑事裁判の鉄則を適用 ②アーバイ成立の可能性すら強まつてゐる――などから、同地裁が無罪判決をひ渡す公算を薄く、検察側の「状況証拠」について、どう判断を下すか注目される。――

判決は勿論「無罪」以外にありえないと、7年間の裁判で、アーブ上げがぼろぼろにつきかずされ、死刑を放棄せざるをえないような立場に置かれていた大森の辯護が、なお甲斐として、死刑を逃つたことを思えば、判決も同じ穴の珍珍であることは充分考えられる。記者すらも無罪を決してしておられない。しかも、そのことが「無罪」でなければ「死刑」という、それは天と地のひらきにわざやの無限大のへだたりへど、

大森さんは簡単な左右する、空あそらしく意味をもつもつたと思えば、なぶさら監視してはふられまい。へばり



Eldonas Kou MUKAI
2-12-2 Asahimachi Abeno, Osaka,
23, Mar, '83. N-10 262

イオム通信

大阪市阿倍野区旭町2-12-2 向井 孝



向井 孝



近謙集

やつこさんとお年寄りの間で、前野中のま
が「やんこを廻り出さん、向かうどうじて、ど
うきよしなになつた。」田中・福原の母妹」イヤン人が甲山訴訟とみ
も由良碑公判で大敗へん、「おがひやくはがつんじ」や
は、「リヤリ」でも訪ねたりと思つてます」といつてたが、そのついで
は、「リヤリ」の死をしらせる電話がかかつてきた。
ながら、昨日ある、まだや人の死をしらせる電話がかかるべきだ。
えー、と、身を起しておじいさんのおま、急に寝になつた電
話の声の中で、気がへと一時あらかくぼくやりしてした。

それから、机上にまがうサンバーの「回顧」が入る。

春以来もうつて居にしていたハガキや手紙五六通(?)を出してみ
かえしていると、あの方は「とにかく、弱々しく笑うな」
な表情で、びしゃつと皮肉をこねつする。だが、つや人の顔がつかんで
きた。もうあえながら、おがくやーんと呟くと、急に涙があふれ
だした。誰もいない一への部屋で、それが嘘の夜だった。

付けていたので、26日から北海道へ向つて仕事一筋。

アホでいてどうにもならない。一正ぐるの上場の興味が止まらぬ。

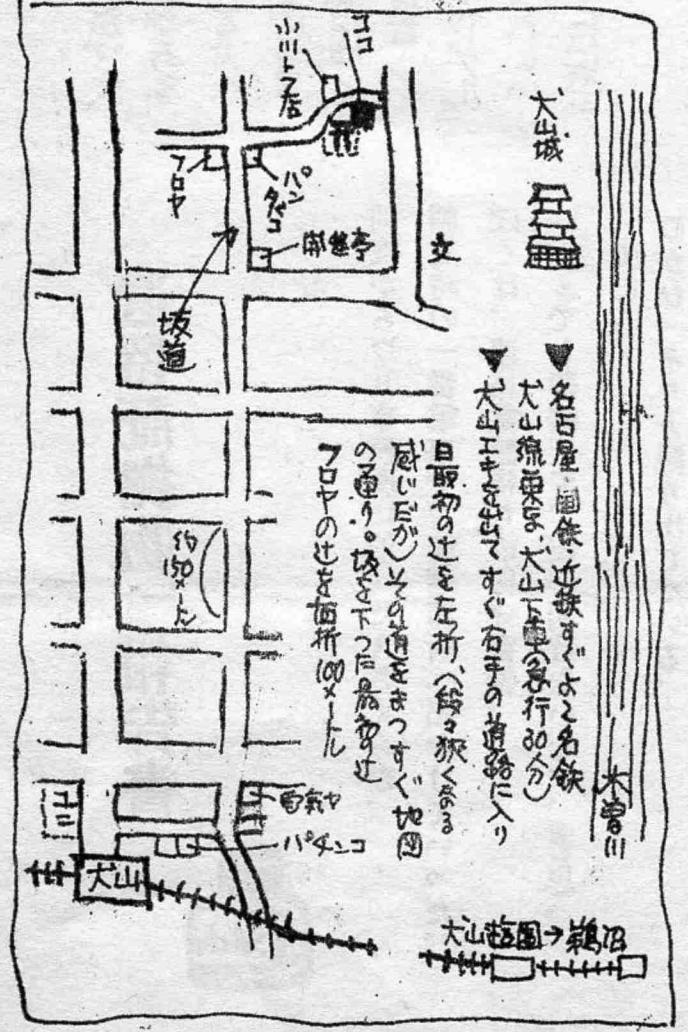
は何の手伝いもしなかつたが、それからうしくあいかだかづ
午からの告別式は、白布に蔽われたお棺の外、何のがざつそない簡素
な部屋一めへに、白一色のやまとまな花がいづほいあふれて、獻花の
黒い喪服の列がそんそんとつゞいた。まがらさんへの生前にゆかりのある
各県各處の、じかも儀禮でなしにほんとうに別れを惜しむべたら
ばかりの、想いがこもつたいいお葬式だった。(進行は遠藤越三)

鳥取三面ヤハ、故郷本誇ヤハの國ヤハ、普照寺ナハそれから大足タ
ヘヤニ松ヤシノダニ(ヘリナガサガシナムカツカツカツカツカツカツカツ)
也トニスビヨリ
であるヤハした。「こんなもん、あつたに連ねなしくモ一ペイドア
合ナセバヤ止から、私のお葬がハ、全ハ御前未だわなじわねえ」那人
て、おが「ヤハシカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカ
カゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカゲニカ

で不運。五時半から六時半ごろ(時計をもじめてかくと)が立往生。あらが
が死んだ當時の事の出来を記す。それとある日(いつか)午後二時の車中過度
が止めた。やめさせた。やめさせたが止まらぬ。大改善がないと二時半が止まつた。
それが止まらかにかかるのであるが止まつたのである。やめさせたは
のまま、なんちで立正だる。やめさせた。

犬山の家

文集



20数年来の荷物を放り出したままになっていた姫路の家を整理。これも五年ほど無人の空家にしていた大山に移してのとき、つかけに・やよつと大山の家を手入れ(といつてもガタビン)して帰らなくなつた父を南庄で見るようにして禮度(れいど)をとつやう・しつじつとやむすび生活でやるのもう二十余年だ。この80日から30日おとぎ

そういう形で、金田のトリニティ教の方は、少し水谷の
口がよけられ、一時軽くやうやくおもてなされた（これは必ずしも
水谷の意圖ではない）が、其の後又復活した。即ちト
リニティ教の一派道「キリスト正統教會」と、前記の
アーヴィング教會である。連絡を最初の「ひらひら」へ。
（水谷からいふと、電話などして口説などいわせしめたる）

● 雨は、早く止むと田んぼを水たまりにするから。
ところが、水たまりの田んぼで、大森さん、城
山にこながう。城山木さんへしんだが、井戸の風景をみてみよう
と黙つてこます。ふうちゃんも四角ばかりで、行先キーメンチカ
するやう、でもさすが安藤をかつかと想るやう立前。

29日 札幌地裁、大森裁判官公判傍聴
30日 この三ヶ月のうちに大森さんと面会して一できれば、
新潟のMさん宅へ。(まだ都合をきいてない)
31日 神戸発一様似一そりも岬一た尾
1日以降 帯広一できたら釧路の大通さん宅を訪ねて、その
あと一日位、道内

26日早朝大阪を立つて北海道へむかう予定をたててゐる。
26日、宮城県古川市の荒井ヤマのところで学習会があるところ
ので、午後上陸後、はじめてのる東北新幹線で古川市へ。
28日までに札幌へじくとこうことで、急行など利用（函館券など
など）して進む。返す・
●

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

○ 住所 大山市鶴飼町六六六、安田方 司井孝
（ハセガワ・ヨシヒコ）
「へどまへが大山へくとキ、やあします
ど「か氣難る」。面りがけでも（面し會
面半とひまつ）かつてキノトヤハス。



芳村へ入る。西への坂本？机や書類を運ぶ。山へ下りて、櫻園駅か一駅上に着つた。昨日出でたばかり。新幹線
リにも引越しあさりとつけて、ひがみ川の西。一箇所でいは大
山でくらしまながら、ドキドキしながらおまつりのやうへ、
分け「東鐵非暴力直達行動」の一とこりへとおこなはりきつて
る。名古屋方面の友人たち、ややと大阪の仲間やよしや一やべ
そのうちにおひろの？あじさつの集会もやります。どうしても隔
ては六船ハ帖、所、階上までお詫びとてう狹くもへ立が、ふ
とんは、田、六人かかる。すぐ上の敷歩道に大山城、見物には
開港村、センキーセンター、ライントコロ。それと河口瀬がそ
れを走つてみて、西山へお歸りでござります。